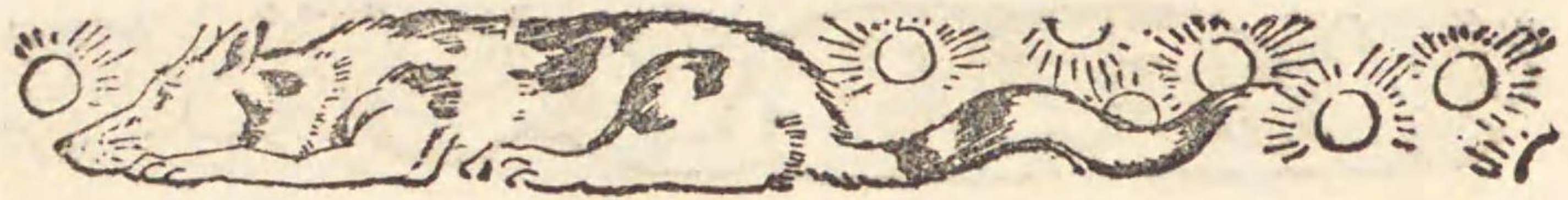




軍が火牛の策を用ひて七十餘城を取返した例に慣ひ、火牛の手段を用ゆることになりなりました。で、早速四十五人の兵士を四方へやつて三十六頭の牛を買ひ集めさせると、牛の兩角へ松火を結びつけ、用意万端整つて待構へてゐました。それとは知らぬ顯定成氏は再度の敗北に無念やる方なく、今度こそは一舉に勝負を決してくれんと、四万の大軍に幾百輛の三連車を押出し、鯨波の聲をあげてドツと押寄せました。忽ち敵軍は文明が岡を十重二十重に犇々と取巻いて攻め立てましたが、不思議や信乃現八の軍勢ははひつそりと静まつて一同相手になりません。やがて、顯定の烈しい下知に敵の士卒はエイヤ〜と掛聲して岡の六合目邊まで登つて來ました。時分はよしと信乃現八が下知すると、豫て用意の大木大石をゴロ〜と投げ落しましたので、敵は手足を折られ、頭を碎かれて這々の體で逃出しました。さすがの顯定もこれには弱つて、今度は兵糧攻めにするこゝとして、岡のまわりに篝火を焚いて、嚴重に張番しました。夜は次第に更けて、二更の頃となると、



顯定、成氏の手勢は段々と眠氣を催し、うつら〜と船を漕ぎ始めました。と、突然金鼓の響、銅羅の音、攻太鼓のひびきがヂャン〜、ブウ〜、ドン〜と消魂しく起つたので、敵勢一同は夢を破られてガバと跳起きました。が、既にその時には信乃、現八、逸友、直元の四將は三方に手を分け、例の牛の角に結んだ松火へ火を移し、ドツとあげた関の聲物凄く、一齊に攻めかゝりました。牛は角に火をつけられて熱くて堪りませんから、モウ〜と吼へ猛り乍ら、眞一文字に敵陣さして躍り込みます。三連車も何のものかは、猛り狂つた火牛は車の上を飛越へ、或ひは車の下へ駆け込み、無闇矢鱈に荒れ廻りましたから、忽ち火は車に移つて燃え出しました。敵軍は只ワイ〜と騒ぐ許りで、手もつけられませんが、それに牛に突き殺される者や、火に焼かれる者があつて、四万の大軍は上へ下へと沸き返る様が大騒動。ところへ信乃現八が豫ねて用意して置いた烟硝の紙包みをバラ〜と投げつけましたから、火の手は益々ひろがつて、三連車は何



百臺となく焼かれ、人馬は半死半生の有様となりました。かうなつてはごうにも仕方がないので、顯定、成氏初め大將達は薄情にも味方の軍卒を打捨て、尻に帆をかけて一散に逃げ出しました。折柄横手からドツと喚いて跳り出した一万餘人がありました。顯定、成氏は此處にも敵の伏勢がゐたかと眞蒼になつて、進退谷つてうろ／＼してゐると、何の事やら、それは善阿判官景春の率ゐる援軍でしたので雀躍りせん許り打喜び、直ちに敗兵を盛返して里見軍へと殺到しました。何しろ新手が加はつたのですからその勢ひ當るべからざるです、勝誇つた里見勢もさすがに怯みかけました。ところへ又突然、敵の後陣めがけて不意にドツと攻めかゝつて来た武者があります、顯定、成氏が驚いて見ると、こは如何に、年の頃二十才前の美少年が、大紋の袖を背後に結び上げ、腹巻、小手脛當、一頭の駿馬に跨り、鐵鞭を振り乍ら當るを幸ひ薙倒し蹴散らしてゐます。之に従ふ四五人の武者も負けず劣らず猛勇振りを發揮してゐます、僅かな勢でしたが、何しろ不意



を討たれたことゝて、敵の勢はドツと浮足立つて忽ち四方へ散つてしまひました。ところでこの美少年は一體何者でせう！彼こそ京都から歸る途中、計らず此處を通りかゝつた大江親兵衛なのでした。家來は與四郎、記二六其他の者なのでした。現八信乃は親兵衛の手をとつて、思はぬ邂逅を涙に咽んで喜び合ひました。そして直ちに親兵衛をつれて國府臺の城へ赴き義通公に目通り致しました。義通公のお喜びやいか許りでしたでせう！

四、水軍も大勝利

十二月八日、いよ／＼水戦が初まりますので親兵衛は加勢に赴くこととなり、愛馬青海波に打跨り、記二六、與四郎の兩人を従へ、洲崎の本陣、義成公の許へかけつけました。親兵衛は殿に目通りすると歸國延引の事情や今回の合戦の模様等を奏上いたしました。殿には親兵衛の殊勳を大變お賞めになつて御感頗る斜な



らずでした。つづいて毛野、道節に會つて久濶を語りました。と、やがて敵軍の中へ化け込んでゐる百中こと大角の通知によつて、辰の刻より水戦が始まるこの事でしたので、親兵衛は早速身仕度整へて、一方の大將となり、船へ打乗りました。此方は扇谷定正、風外道人との約束の辰の刻も間近かと言ふので、幾百艘の船に軍兵を乗り込ませ、里見勢を只一撃ちにせんと意氣込んでゐます。何しろ大軍のことですから、房總の沖も一面軍船で埋まるばかり、旗印は幾旒となく林の如く風に翻り、甲冑刀劍は日光にキラ／＼と輝き、ワア／＼と言ふ関の聲は龍宮にも聞えるかと思はれるばかりです。いよ／＼辰の刻となると、果してサツと乾の風が吹き来つて、大浪小浪が騒ぎ出しましたので大將の定正はべたと許り、直ちに金の采配を振つて、出發の下知を下しました。海を掩はん許りの兵船は威風堂々、海神も驚かして進み初めました。先陣にある三十艘の舟はごうしたものが少しも前へ進みません。そして一艘づゝ上流下流の方へと漕いで行き



ます。審かしく思つてゐる中に、今まで乾の風であつたのが、急に巽の風に變つてビュー／＼と猛烈に吹き立てました。定正の軍兵は驚いて船を押返されまいと、船夫に命じて櫓を漕がせましたが、何しろ猛しい風ですから船は見る／＼中に後ろへ／＼と流されて行きます。定正は地團駄踏んで怒ると『ヤイ道人、風の方向が違つたではないか！ よくも欺したな、己れ憎くき道人！』と吼へたけりました。その中に前後から挟んだ大角の船からズドンと一發狼火が上つたかと思ふと、彼方此方の三十艘の船からは一齊に火が燃え上り、アレ／＼と言ふ間に定正方の軍船の真只中へ漕ぎ入れました。敵は大狼狽で逃げ廻りましたが、何しろ風が強いので思ふやうに梶がとれませぬ。却つて火の船と衝突して燃え出したり、味方同志鉢合せをして轉覆するといふ有様。ところへ里見方の犬坂毛野、大江親兵衛、犬山道節、犬村大角の四人が數十艘の船を指揮して風に乗じて迫ると、紙に包んだ烟硝をバラ／＼と投げつけましたから堪りませぬ。パチ／＼と物凄い音と共に



に敵の船は燃え上つて、火勢は炎々として天をも焦がさんばかりです。
 定正は満面に朱を注いで口惜しがりましたが、その間にも里見勢は一寸も攻撃
 の手をゆるめませんので、這々の體で命からく、芝浦の濱邊へ船を戻して逃げの
 びました。里見の四犬士は逃げる奴には目もくれず凱歌をあげて引上げました。
 と、不思議、さしも吹きすさんだ風もけろりと止んでしまひました。
 一方定正は、道人に欺された許りに散々な敗北をした事が、どうしても無念で
 堪りませんので『あの賣僧坊主奴、首チヨン切つて八つ裂きにして呉れん』と、
 家來を従へて息せき切つて谷山の洞穴へかけつけると『ヤイ〜坊主之へ出る！』
 と呷鳴り乍ら穴の中を覗いて見ると、これはしたり、穴の中は藻抜の空で、法師の
 姿は影も形もありません。何で、大法師が今頃までウロ〜してゐるもんですか。
 『ヤーツ、さては風を喰つて逃げ失せやがつたか、残念！』定正は齒をギリ〜
 噛んで口惜しがりました。ところへ顯定の使者が宙を飛んで駈けつけて、戦ひ利



非ず敗れたから、どうか援軍を寄越して呉れとの注進です。水戦で敗けてもせめ
 て陸戦で勝つたならと思つてゐた唯一の心頼みも今は空です。さすがの定正も呀
 ツと腰を抜かさん許り打驚きました。勿論、援軍を出さうにも兵隊がありません。
 よし又援軍を出した處で、あれほどの大軍が負けた位ですから、逆も勝利は覺束
 ないのでした。こゝで定正はすべてを観念すると、残兵をまとめて五十子城へ引
 揚げました。そして軍議評定の結果、里見家へ和睦を申入れました。里見家では
 仕かけられた戦さなので餘儀なく戦つたまで、すから素より異存なく、和睦の旨
 を承知しました。かくて里見家は大利大万歳です。

この事が朝廷の上聞に達すると、勅使秋篠將曹康當を下されて、義成公を正四
 位上左少將に任せられ、安房守上總介の役は元の通り、嫡子太郎義通を従五位下
 右衛門佐、義實公を治部卿に任せられ、又八犬士は各々従六位下に叙され、且つ
 犬江親兵衛を兵衛尉に、犬坂毛野を下野介に、犬塚信乃を信濃介に、犬山道節を



帶刀先生に、犬村大角を大學頭に、犬川莊助を長狹介に、犬飼現八を兵衛權佐に、犬田小文吾を豊後介に任官せられました。その上里見家には朝廷の臣たるべしとの教書を賜りました。義成公初め八犬士は余りの光榮ある恩賞に感激して、忝くお受けに及びました。その御禮として里見家からは、義實義成の名代として、照文、大法師、これに八犬士を従はせて、打揃つて京都へ遣はされました。翌年、即ち文明十六年、一同は管領畠山政長に對面し、ついで參内し、天顔を拜し奉りました。照文、大は左少將義成と、治部卿義實の名代として、假に昇殿を許され、八犬士も亦、その手柄格別とあつて、特別のお思召で、拜謁を差許され、共に忝けなくも天盃を賜りました。又、この戦ひに伏姫の功淺からずとの仰せあつて、富山の神として祭れとの御言葉もあり、特に、富山姫神社といふ五字の御親筆をさへ賜りました。一同は面目身にあまり、いや深き御鴻思にことごとく感激し、夢の如き心地で御前を退りました。

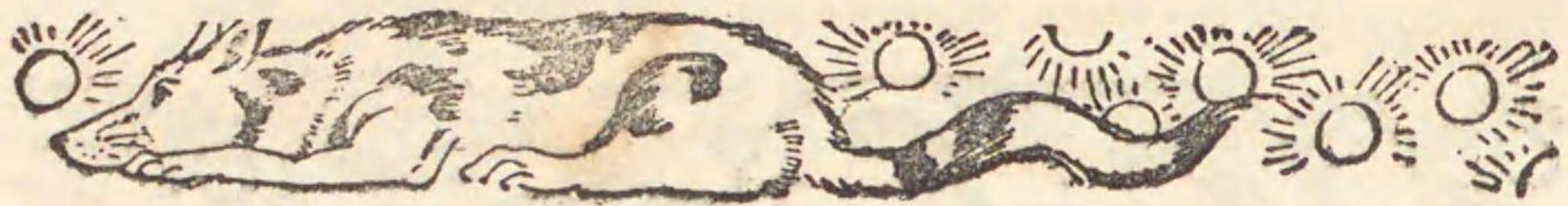
その後、義成公は、大法師及び八犬士等に命じ、この度水陸で討死した敵味方の菩提を弔ふために大施餓鬼を行はしめました。領内の民草はますます里見家の仁政を慕ひその徳を謳歌しました。

二十二、榮ゆる里見家

一、八人の美姬

文明十六年八月十五日、この吉日を選んで、國主里見少將義成朝臣は、烏帽子朝服姿にて城中にお出ましになりました。兩家老初め八犬士、諸侍は召に應じて、何れも熨斗目衣袴のいでたちで、綺羅星の如く居並んでをります。やがて義成は、先づ第一番に八犬士をお呼び出しになると、夫々一万貫の知行を賜りました。その格式は家老の上席、上大夫を仰せつけられました。即ち次ぎの如くです。

安房國館山城主 采邑一萬貫文 上大夫 犬江親兵衛尉金碗仁





安房國東條城主	采邑一萬貫文	上大夫	犬塚信濃介金碗成孝
安房國犬懸城主	采邑一萬貫文	上大夫	犬坂下野介金碗胤智
安房國御厨城主	采邑一萬貫文	上大夫	犬村大學頭金碗禮儀
安房國朝夷城主	采邑一萬貫文	上大夫	犬山道節帶刀先生金碗忠興
安房國小長狹城主	采邑一萬貫文	上大夫	犬川長狹莊介金碗義任
安房國神餘城主	采邑一萬貫文	上大夫	犬飼現八兵衛佐金碗信道
安房國那古城主	采邑一萬貫文	上大夫	犬田豊後介金碗悌順

その他の家老はじめ、諸將士も残らず手厚い恩賞を賜りました。その後、義成は富山の岩屋に石の祠を作つて、朝廷から賜はつた勅額を、御神體として納め、その前には立派な石の鳥居を建て、勅額の模造を掲げることとし、三十餘日を費して立派に完成致しました。白木造りのいとも嚴かな神殿は、杉の木の間、爪見えて、金の金具は朝日に映えて神々しき限りです。それ以來、この



靈地に杖を曳く善男善女の影の絶えたことがありませんのでした。

——ところで、義成には八人のお姫様がゐらせられました。一番長上を静緒姫と言つて十九歳、その次ぎを城之戸姫、第三を鄙木姫と呼んで、同い年の十八歳、第四を竹野姫、第五を濱路姫と言つていづれも十七歳、第六を菜姫、第七を小波姫と申し共に十六歳、第八の弟姫は十五歳にられました。が、いづれも稀な美人で、花の顔、玉を欺く肌え、翠の黒髪美はしく——一點の非の打ちどころもない方々ばかりです。義成は、忠臣の八犬士に未だ定つた妻がないので、この八人の姫の婿にもと思召されてゐました。そして、或る日、その事を八犬士に申し傳へられました。犬士は僅かばかりの手柄で、一城の主になんせられたのさへ身に餘る忝けなさと思つてゐたのに、今又姫を下されるとは、餘りに恐れ多いとて御辭退申し上げました。しかし、義成朝臣は「何の辭退は要るものか、汝達の恩は里見家にとつて忘るゝ事の出来ぬものぢや、



不束な娘であるが貰ふてくれ」と、仰せられて、八犬士に下される事となりました。かく話が決まつた上は善は急げといふので、黄道吉日を選んで、静緒姫は犬江親兵衛仁と、城之戸姫は犬川長狭莊介義任と、鄙木姫は犬村大學禮儀と、竹野姫は犬山道節帶刀先生忠興と、濱路姫は犬塚信乃信濃成孝と、榮姫は犬飼現八兵衛信道と、小波姫は犬坂下野胤智と、弟姫は犬田豊後悌順と、それ、神の縁の結ぶところに依つて、芽出度くも華燭の典を擧げました。義成は、雛のやうな八組の夫婦を打眺めて心から満足げに微笑まれました。

二、第二の八犬士

長い八犬士の物語もいよいよ終る時が参りました。早いもので、八犬士が安房へ戻つてから、いつしか十七八年の歳月が過ぎ去つて、その間には義實公も亡くなられ、多くの老臣達も逝きました。

けれども、里見の家はいよいよ榮えに榮へて、波風一つ立たず、春の様に平和に治りました。安房上總下總の人民達は、その徳に感じてひたすら業にいそしみましたので、一人の不忠者、不孝者さへ出さず、皆同胞の様に仲よく睦み合ひ、來る年來る年も豊年を迎へて、それは、楽しく暮しました。これといふのもみな義成の仁政の致すところと、民は慈父の如くに殿様をお慕ひ申すやうになりました。この頃になると、不思議なことにも、八犬士がそれ、一つ宛持つてゐた、かの靈玉から、仁義禮智忠信孝悌の文字が、いつしか消えてしまひ、又牡丹の花の形をした痣も、いつしかなくなつてしまひました。又、大法師は、この頃佛敎の奥儀に達して、出沒自在の術を覺え、今日は富山の岩屋、明日は麓の延命寺と言つた風に、諸所方々に轉じ又は勤行をされました。しかしその姿は誰にも見へず、たゞ心の思ふままに何處へでもゆかれるといふのですから、不思議な術です。のみならず、法師は富山の岩屋の中で、五十體





の諸菩薩の像を刻み、かの伏姫の首にかけられた珠數の百個の小珠を眼にちりばめて開眼され、又、別に四天王の神像をも刻んで、かの八犬士の靈玉をちりばめて、開眼し、これを安房の國の四方に埋めて、この國の守りとされました。

やがて明慶九年四月十六日となりました。

この日は義實公の十二年の法會にあたり、又結城で戦死した忠臣の六十年忌に當りますので、里見家では盛んな法會の式をあげて、その菩提を弔ひました。

大法師は、この式に臨んで大役を果たすと、延命寺を指月院の念成にゆづり、富山の岩屋の中に籠り、人の力では開くことの出来ぬやうに、大きな石で入口を閉し、それきり世間へは再び姿を現はさなくなつてしまひました。

八犬士もこの頃には、多くの男女の子供を持つて、みな相當の年頃となりましたので、それごとくその家を、その子の犬塚信乃、犬坂毛野、犬山道一、犬川額藏、犬村角太郎、犬飼玄吉、犬田小文吾、犬江眞平にゆづつて、八犬士は打連れ立つ



て富山に上り、觀音堂の傍らに草庵を結び、この世との交りを断ちました。最初の中は、忠實な下僕に、養焚きの世話等をさせましたが、後には、それをも返してしまひ、八犬士は心にかゝる雲もなく、こゝで悠々と月日を送りました。春は麓の花や小鳥を友とし、秋は峯の紅葉を眺めくらし、夏は谷川のせゝらぎに耳澄し、冬は爐ばたに櫛くべ乍ら語り暮して、こよなくも楽しくすごしました。

かくして二十年あまりたちました。多分雲を吸ひ霞を喰ひして生きてゐたのでせう。その頃には、里に残した奥方達はいづれも年老ひて亡くなられましたが、良人である犬士達は、不思議にも少しも衰へないで、仙人の様になつて、山の中で、元氣よくくらして居りました。

里にゐる二代目の八犬士達は、その後父上のごことが案じられますので、或る時、連れ立つて山に登り、その庵を訪ねました。すると成孝、胤智、仁、禮儀、義任、忠興、信道、悌順の八人は姿こそ老ひ果てましたが到つて健康な様子なのでした。



八人の父はいかにも待つてゐたかの如く、それ〴〵吾が愛し子を膝近く招き寄せると、いと懐しげに見守り乍ら、沁々として、君臣の道、人の踏むべき道、その他人として色々な大切な事どもを、噛んで含めるやうにして、諭されるのでした。八人の子供達は有難い父親の訓戒を涙を流して謹んで聞いてゐました。やがて言葉が終つたので共に頭をあげると、あな不思議！今の今まで眼前にあつた八人の老父の姿は忽然一沫の烟となつて、虚空に消え去り、あとには得も言はれぬ馥郁たる薫香がそこはかとなく漂つてゐるのみなのでした。

それから後、第二の八犬士は互ひに父の遺訓を肝に銘じて忘れず、義成、義道の兩君に仕へ、それ〴〵父にも劣らぬ忠義を勵み、人の鑑として万人から崇められる程の立派な人となりました。

里見家の天下はいよ〴〵泰平、四海浪おだやかに、万民は安らかに日を送り、お家の礎は萬々歳でありました。何と芽出度い限りではありませんか。(をばり)

(天近製本)

昭和三年十月二十二日 印刷
昭和三年十月二十七日 發行

定價一圓八拾錢

郵税十二錢

課外讀本
學級文庫

八犬傳物語

著者 權所 有

編輯者 兼 行 者

東京市本郷區森川町一番地
石 井 蓉 年

印刷者

東京市本郷區森川町一番地
野 口 道 方

印刷所

東京市外西巢鴨町宮仲一八〇番
植 松 印 刷 所

發行所

東京市本郷區森川町一番地

株式會社

ヨウネン社

總發

東京四七八〇番
大坂六九一四五番

學級文庫

赤穂義士物語	幕末物語	神代の日本	弓張月物語	ギリシヤ英雄傳	平家物語 <small>上下</small>	家なき子	ジャンヌ・ダルク	まごころ日記(クオレ)	イソップ物語集	グリム物語集	アンデルセン物語集
少年少女 經國美談	インドの童話	ガリバー旅行記	西遊記	噫・無情	日清戰役物語 <small>上下</small>	八犬傳物語 <small>上下</small>	ロビンソン漂流記	義經物語	日露戰役物語	支那の童話	乃木將軍
太閤記	青い鳥	西郷隆盛物語	十五少年探險記	ナポレオン物語	小公子	太平記	シーザー物語	キング・アーサー物語	曾我物語	ドン・キホーテ	アラビヤン・ナイト

各册 金九錢 送料 金八錢



児乙部28-1-7



1200600483666

